

『中学卒業したてで、国家賠償訴訟、その後、国会議員、いま、区長として前例を創る』

世田谷区長 保坂 展人 先生

2021.4.22

○ゆき 前の時間はゼミだったのですが、感動する話ばかりでみんなうっとりしてありました。この公開講義では、愛称で呼ぶことになっていますので、「えにしの会」のときから、「ノブティー」と呼ばせていただいております。

うわさでは、奥様とは内申書裁判のところに知り合ったと聞いたのですが、本当ですか？

○保坂 本当は、中学生のころに、「ベ平連」のデモで知り合いました。

○ゆき これ、特ダネかも(笑)

何から話していただいたらいいかなあ。プロフィールはご自身ではなしていただくことにいたしますが、仙台生れというのは、私の母が育ったところで、それで塩からいもの好きになってしまい。。

ところで、何度も選挙に落ちたそうですが、何回落ちたのですか？

○保坂 3回ですね。はい。

○ゆき 3回も。。。

○保坂 衆議院議員に3回当選して、2回落選して、参議院選挙で1回落選して、区長選挙に3回勝っているのです、6勝3敗になります。

○ゆき 私、選挙に出たことがないので、落ちたときの気持ちというのが、わからないのですけれど、どういうものでしょうか？

○保坂 僕は特にショックを受けることもなく、次の日から「これをやろう、あれをやろう」といって動いていくようなタイプです。割と、うまくいかないことになれているというか…。

○ゆき まあ。うまくいなくても…。

○保坂 子供時代に、結構思ったようにいかないことが続いていたので、そういう意味では、何というのか、あんまり怒りが爆発するとかはしませんね。

○ゆき シューンとなったり…。

○保坂 シューンともならないです。全然。(笑)

○ゆき ならないですか。珍しい…。

○保坂 そういうストレスには、そういう意味では強いです。選挙に落選したというときに、「よく平気で翌日から動いているね」と言われます。

○ゆき では、これから少し話していただいてから、質問を何でも受けてくださるそうなので、よろしくお願いします。

小学校6年生のときに、「社会党はなぜ負けたか」という論文をお書きになったというKh びっくりしますが、そのことと、内申書で裁判をおこしたことは、つながっているような感じもしますが…。

○保坂 はい。1955年、「サンフランシスコ平和条約」の年に生まれています。昭和でいうと30年ということになります。それで、小学校6年生というと1969年になります。いわゆる、東大安田講堂で始まり、学生運動がかなり燃え盛った時期です。そのときに6年生だったのかな？ その6年生のときの選挙で社会党が大敗するのです。そのとき、最後に当選したのが土井たか子さんという方だったのですが、もともとそういった政治にも関心があったこともあって、論文というよりは新聞の切り抜きではありますけれども、自分なりに集めてみたというところですよ。

小学生に政治がわかるのかというと、やはりわかるのですね。平均的にわかるわけではなくて、そういう意味では、ややませていた少年だったのかもしれないというのと。小学生のころから近現代史にすごく興味があって、「なぜ日本は戦争に突入していったのだろうか？」とか、「60年安保って何だったの？」とか、「ベトナム戦争ってどういうことでやっているの？」とか、いろいろなことに興味がわいていて、片っ端からいろいろ本を読んでいたという、そんな子供時代を過ごしました。

○ゆき 社会党は、なぜ負けたについて、どんな結論になったのですか？

○保坂 これは、成田さんという方が社会党の委員長でいたのですが、当時言われていたように三つの欠点があると。一つは、議員政党的体質です。要するに、国会議員を中心とした政党、あるいは地方議員を中心とした政党。それから2番目に、労働組合依存。要するに、労働組合におんぶにだっこ。それから3番目に、日常活動の不足。ここが敗

因だったのではないかというようなことを考えました。これ、実は、成田さんが言ったことなのですけど。

○ゆき つながりがありますよね。

○保坂 今も、全くぴったりです。

○ゆき 内申書裁判のことは、司法試験に出たりして、大学の法学部の授業の中に必ず出てくるという話ですけども…。

○保坂 いわゆる憲法の判例の中に、私の内申書裁判事件の最高裁判例というものが出ています。残念ながら負けた判例です。私が負けた判例なのですが、よく弁護士の方たちに言われるのが、「判例の人と会えた」と…。判例の人は、大体死んでいるのです。生きて動いている判例の人はあまりいないのです。ということで、最高裁の判決を迎えた当時は30歳ぐらいですか、31くらいだったかな…なのです。

事のついでに話をすれば、憲法をそんなに熟読しなくても、裁判の公開ってありますよね。そのくらい皆さん多分御存じだと思うのですが、実は当時の最高裁判所というのは、民事裁判において大法廷を開かない場合がほとんどで、大法廷は割と高裁までの判決をひっくり返すときに開くのですが、大法廷を開くというのは注目事件になります。ほとんどの事件において大法廷を開かずに、小法廷でどんどんどんどん棄却していくことが多いのです。それで、16年もかけた裁判。この判決がいつ出るのかを教えないのです。実は…。

○ゆき ご本人にも、いつかを教えない。

○保坂 本人には絶対教えない。マスコミにだけ教える。だから記事が書けるわけです。ゆきさんも新聞記者だったけれど、地方記者クラブにそっと1週間ぐらい前に、「内申書裁判は何日だよ」とささやきがある。僕はマスコミで仕事をしていたので、いくつかの社から、「何日の午後は、何をされていますか？」とか、そういう電話が2〜3本入って、「怪しいな」と…。そのうちに、ちょっと決定的な情報をつかんだ。「あしただ！」とつかんだのは、夜中の1時半です。それで、みんなをたたき起こして、横断幕とかをつくって、最高裁の自分の判決を聞きに行った。これ、初めてなのです。普通は知らせないから、聞きにいけないのです。

私たちが行ったら、傍聴席に案内するのです。そうしたら弁護士が、「いや、この方は原告です。訴訟の当事者ですよ」と言ったら、「はい。では、こっちへ」と。そこで座ったら、裁判官が決定を読もうとして、とまったのです。実はそこは被告席だったという…。だれも

座ったことがないのです。そういうことだったのです。

「これはおかしい」と…。最高裁を訴えられないかと随分研究して、後に 1996 年に国会議員になったときの私の初質問は、法務委員会における最高裁判所長官代理に対する質問でした。「裁判の公開に反しているではないか。なぜ教えないんだ」と。これ対して——これはビギナーズラックというのですけれど——裁判官会議、つまり最高裁の裁判官の会議が開催されて、「民事訴訟法の改正に伴って、これまでは通知しなかったけれど、これからは通知するようにいたします」と言ったのです。さすがに自民党の議員たちがどよめいて、「おい。今、何て言った」「こんなことは初めてだ」みたいな。「裁判所が君の質問で認めたんだぞ。これはすごいんだぞ」みたいな、「そうなのか」みたいなことがあって、それで質問ばかりする議員になったのですね。

○ゆき 質問魔でなく、質問王ですね。

○保坂 質問魔ではないのです。質問王。

○ゆき 中学を卒業されたけれど、内申書のせいで、高校はどこも不合格になって夜間に行くけれど、途中でやめてしまったのですね。夜間に行っていても、つまらなかったのですか？

○保坂 新宿高校の定時制というところに、2次募集だったのですが一応入れたのです。当時、500 人ぐらいの生徒がいましたかね。新聞配達店に住み込んで働いている同級生とか、地方から出てきて就職して、夜学に通うというタイプの生徒と…僕なんかもそうですが、高校からはみ出して中退になって、入り直してくるような…そういう生徒と二極化していたのです。

結局、中学時代はいろいろ校則とかが大変厳しくて、物を言おうにもなかなか言わせてもらえなかったのですが、高校は大変自由で、生徒会の活動とかも本当にたくさんやって、ロックコンサートもやりました。そのうち、あることで沖縄出身の漫画家志望の女の子が、自ら命を絶つという事件があって、亡くなったのです。

そのことを新聞記事で僕らは知なのですが、学校のテストが翌日からあって、何事もなかったかのように日常が続いていくということに、私ではなくて当時の 24 歳の生徒会長が一人覚悟を決めて、ハンガーストライキというのですが、御飯を食べないで抗議した。抗議するというのは、だれに抗議しているのかというと、学校に対してではなくて、同じ学校に通っている仲間が亡くなっても、何事もなかったかのように平然と暮らしている学校生活にです。日常って、これでいいのかというような問いかけでした。

ハンガーストライキなので、11 月で寒いので、最初は TENT を建てたのです。定時制高校っておもしろくて、大工さんとか職人さんもいるのです。先生に許可を取って、「健康上

の理由で、あまりに寒いのでちょっとした小屋を建てさせてください。床がコンクリートなので、マットをちょっと敷かせてください」と言ったら、「わかった」と…。それから、こたつを持ってきた女の子がいて、「電源も必要なので、電気も少し使わせていただけますか？」と。そうしたら、定時高校の先生も本当にさばけていて、「おお、保坂くん。ガスはいいのか？」って言うくらいでした。

それで、学校に小屋を建てて、彼が住み込んで、最終的にドクターストップで終わったのですが…。そういうことをして問いかけて、何か、やることをやり尽くしたというか。そのまま、また授業に自分だけが戻っていくということが、全部の責任者としてできなかった。なかなか学校に戻るができなかったという、ちょっと美学みたいなところです。本当は、やめたくなかったのです。

○ゆき 恰好つけちゃった？

○保坂 まあそうです。

○ゆき そのあとは、教育ジャーナリストになっていかれるのですか？ どうやって食べていったのですか？

○保坂 定時制高校に行っていたときから、15歳で家を出て、アルバイトをいろいろやりながら仕事をしていました。ただ、学校に行っているということで、結構どんな仕事でも嫌ではなく、例えば17くらいの時に、銀座とか六本木の店にオレンジジュースとかを納品している会社で、空いた瓶がトラックで回収されてきて、その瓶を洗う責任者をやったのです。その仕事はすごくおもしろくて、圧縮すれば残った時間は何をやっていてもいいということで、自分で工夫して能率を上げて、大分本を読みました。ですから、そのときは精神的にすごく安定していて、1日に1～2冊の本を読んでいたのです。

ですが、学校というものは、やめてみると精神的に安定しなくなるのです。まじめな生徒ではなかったけれど、やはり帰属していたのです。だから、自分はどこにも所属していないということの不安定さを、とても感じました。そのため、とても考え込んでしまった。

そのときに魯迅という作家の文章に出会って、非常に内省的に自分を見つめて分析をし、時代に問いかけていくような文章を自分でも書いてみたいと思いました。当時はコーヒーが150円ぐらいの時代でしたけれど、喫茶店に行って、そこでノートを広げて、魯迅の書いたエッセイの少し気に入った部分を書き写しながら、同じような文体の文章を書けないかなと思いながら、1時間で1行とか、3時間かかって5行とか、それでも、「やはり、これはだめだなあ」と…。そういう、ある種の修行みたいなことをしていたのです。

文章の修行。それでも物書きになるためではなかったのです。「自分はどこから来て、どこへ行くために今生きているんだろう。そして、この先何をしていくべきなのか。今、自分

は何を得て、何がないのだろう」というようなことを考えていた。

実は、その前に文章をたくさん書いているのですが、全く書けなくなった時期なのです。それは、人の書いた文章を全部そのままコピー・ペーストして（その当時はパソコンとかはありませんけれども）、要するに影響を受けた本を、そのまま自分の言葉であるかのように書いていたことがありました。というのは、時代で言うと学生運動がすごく台頭していて、連合赤軍事件とか、内ゲバとか、そういう暗い時代になって、いわゆる学生運動的なものが世の中を変えることはないだろうというふうになったときでした。一方で自分は、内申書や何かではみ出してしまっているわけですから、「さあ、どうしよう」ということで、自分で文章を書きながら、いろいろな仕事をしながら、旅もしました。そして、そのときは国境は越えなかったのですが、日本中どこに行っても大体生きていけるような、そんな力は欲しいなみたいに考えていた時期です。

○ゆき ジャーナリストとして認められて、ものが載るようになったのはいつごろからなのですか？

○保坂 17～18歳のときに、教員の方が読む専門雑誌とかに書くようになっていたのですが、本格的に物書きになったのは――。

自分の裁判で、学校の先生の内申書が、「この生徒は自分の考える思想に凝り固まって、学校の指導や指示に従わない。自分の意見をかたくなに言い続ける困ったやつだ」と、こういう内容です。要するに、「とんでもない奴だ」という内申書だったわけです。それで、五つの全日制の高校に落ちて、定時制の高校に入ったのですが、そういう意味では一たんルールから外れたので――そこでは留学をすとか、大学資格検定を受けるとかという選択もあったと思うのですが――せつかく外れたのだから、とことん外れてみようじゃないかということを考えました。

要するに、中学時代に学校の先生方と、議論というか対話をずっとしてきたのですが、そういう中で、やはり日本は学歴社会で、大学などをきちんと通過していかないと、どんなにすばらしい才能があっても負け犬になるのだと。ある先生は、「地獄に落ちるんだ」と言いました。では、地獄の水が甘いか辛いかわかるか、なめてみようというような、そういう気持ちがあったのです。人体実験をしてみようということです。そういう、少しやんちゃなところもあって、あまのじゃくというか、みんなが「やっぱり学校に行ったほうがいいよ」というときに、意地になって自分の力を試したかったという、若い若者でした。

○ゆき ものを書いて食べていくのは、すごく大変だけれども、よく教育ジャーナリストを…。

○保坂 それで、意外だったのですが、裁判に勝ってしまったのです。1977年くらいだったか、78年でしたか。私が21歳のときに…。

○ゆき 勝ったんですね。

○保坂 1審は、真摯な少年の叫びを受けとめようというような、「学校長は何をやっているんだ」と全面的に絶賛するような…。裁判長が退官した後に、「あの裁判が一番おもしろかった」と言っていました。だって、本人尋問があるのですが、生まれてから幼稚園に入るところまでで1回終わってしまったのです。何が私をこうさせたかということも2時間ずつ5回もしゃべって、その結果、新聞の一面にバーンと大見出しで私の写真が載り、テレビのトップニュースでワーツと、いわゆる大ニュースになったわけです。「中学生が起こした裁判が全面勝訴」と…。

そのときに、当時の中学生たちから手紙が来たのです。30通から40通来ましたかね。読んでみると、さまざまな訴えがありました。いじめのこともあり、校則でがんじがらめだという話もあり、受験をめぐる悩みもあり…。そのときに初めて僕は、自分よりも下の世代がいたのだということに気がついたのです。無我夢中であがいていますから、うしろのことなんか見ちゃいられなかったのですが、その子供たちからの手紙を見て、もしかしたらこの子たちとのかけ橋をするという役割が自分にあるかもしれない。つまり、この30～40通で“氷山の一角”という言葉思い出したのです。

ちょうどそのころ、『月刊明星』という芸能界の雑誌があって、その当時は小泉今日子が出ていたり、横浜銀蠅が出ていたりして、部数180万部です。日本中の中学生の、大体3人に1人が見ている。その読者コーナーに、僕の連載をつくるという話が突然わいて出てきて、体罰の話を書いたら段ボールに3箱くらい手紙が来たのです。「私も殴られた」とか、「涙がとまらなかった」とか…。

それで、「うちの読者というのは、手紙なんて全く書けない子たちばかりだと思ったけれど、見直した」という話になった。読者アンケート1位というのは、それこそ500万・600万使ってハワイにロケをして、巻頭のグラビアを飾る記事だったのですが、その2位か3位になって、これはすごいではないかと。

集英社というのは現金な会社ですから、「本を出そう、本を出そう」ということで、本が出たのです。

それとほとんど同じ時期に、『週刊セブンティーン』という雑誌からも接触があって、こちらのほうが長い記事です。戸塚ヨットスクールで何が起きているとか、漫画家の西原理恵子がまだ高校生だったころに飲酒退学事件というのがあって、その子を紹介したいとか…。僕は10年間、大人とつき合っていなかったです。ほとんど話すのは中・高生。大人は編集者だけという時期がありました。だから日本で初めて、子供のことを子供自身が読むジャーナリズムというものをつくったということですね。

○ゆき それで世の中から教育ジャーナリストとして認められるようになっていった。

○保坂 認められるというのも、最初はうれしかったのですけれども、だんだんと嫌になってきた部分がありました。というのは、1980年代は校内暴力の時代で、半ば過ぎになるといじめの悲劇がどんどん起きてきて、こういう子が僕の本を亡くなる前に買って、最後の遺書を残して亡くなった。そうすると、翌日とか翌々日にテレビに出て、「教育ジャーナリストの保坂さんはどう見るのでしょうか？」ということで、テレビにはよく出ていました。

テレビを見た人は本を買う。そうすると、教育委員会とか、お母さんたちのPTAの会とか何かから呼ばれる。「今、学校問題で取材の第一線にいる保坂さんが語る」というような…。

そうすると、子供たちの本当に痛ましい悲劇があったあとで忙しくなる、仕事がどんどん入る。これは悪循環だ。だから、社会に警鐘を乱打しているつもりでいても、ちっとも子供の環境はよくななくて、そしてまた次の悲劇が起こるとコメントを求められ、そして取材に入る。これが、だんだん嫌になってきました。

○ゆき それで、国会議員に…。

○保坂 国会議員になる前に、これを社会的に解決できないかということを考えます。つまり、こんなに子供たちが亡くなったり、人格がほとんど崩壊寸前になる痛めつけられ方をしているのに、駆け込むところがちっともないじゃないかということです。

実は、イギリスにチャイルドラインという子供専門のヘルプ電話サービスがあるという話をNHKのニュースでたまたま見て、「ああ、これはすごいな」と直観してイギリスに行きました。90年代の半ばかな、3年続けて行ったのです。日本もそういうものをつくっていくべきだということで、亡くなった牟田悌三さんなどが当時は代表になってくれました。今は日本にチャイルドラインという組織がありますけれど、そういうものをつくりました。

もう一つ、本当はつくりたかったのは、子供オンブズパーソンといって、学校でいじめとか体罰とかがあったときに、子供の人権擁護の立場で学校の現場に入って解決をサポートしていくという組織です。これは、世田谷区長になって真っ先につくりました。

だから、そういうふうに社会的なテーマとしてやっていこうという志向があって、教育ジャーナリストをやりながら10年間、土井さんの割と近くにいる、それで国会議員になったということです。

○ゆき 国会議員に立候補してみたらというのは、だれから声がかかったのですか？

○保坂 それは土井さんです。

○ゆき 土井さんなのね。

○保坂 はい。土井さんで、10月4日に立候補が決まって、10月20日には当選していたのです。「ほとんどあり得ないでしょ。そんな話はうそじゃないの？」と言われるけれど、本当なのです。何の準備もなく国会議員になったので、僕は子供のことしか選挙で言わなかったのです。今考えると、少し難しい評価が下るかもしれませんが、当時の選挙ポスターは、「子供大好き。だから守りたい。保坂展人」と。しかも急に立候補したので、カラーでなくて青色の単色のポスターで、本当にフォーマットの。選挙の後半になってカラーになりましたが…。でも、スーツもピンク色のスーツを着て、ひげを生やしてというような、そういうデビューでした。

○ゆき 今、京都にいますのでここに来られない生井久美子さんが、朝日新聞に書いた記事に、ひげを生やしているのがありますので、あとで皆さんに配ります。恰好いいです。

でもそれは、比例だから入れたのですか？ そうなのですね。

○保坂 比例代表選挙が日本で始まったのが1996年です。小選挙区と比例代表並立制といいます。僕は比例代表で東京1位ということが決まっています、多分何もなくても当選していたかもしれないのです。國弘正雄さんという、僕の非常に親しい元参議院議員がいらっやして、「比例代表というのは本当に隔靴搔痒だよ。自分の名前も言えないし、本当にだれがどう気持ち動いているのか、全然見えない選挙だよ」というので、それじゃあということで…。

『走れメロス』というのがありますけれど、土曜日の夕方、夜の6時か7時に都選管が閉まるので、新宿駅にその15分前にたどり着いた若者が、都庁まで走って立候補届を持って行った。ですから、選挙が始まる2日前に立候補をしたのです。事前運動は全くゼロ。公職選挙法が認めている支持基盤の培養活動すら全くなしに、小選挙区にも出たのです。13日間で1万3,000票ぐらい取ったので、1日1,000票だったから、「割と取ったなあ」なんて思っていたら、翌日の新聞が「落選しても国会へ」という大見出しで、よく見たら僕の写真なのです。つまり、マスコミは当時、「入ってはいけない人が当選した」という論調になったのです。

これが僕にとっては、とてもよかったです。国会議員になって踏ん返り返るやつは、僕の知り合いにも大勢いて、「何でこんなに態度がでかくなったんだ」とか、「豹変するんだ」という人がいっぱい…。いっぱいというか、かなりの人が、権力の味を覚えてそのように変質してしまうのですが、僕の場合は、「こいつは落ちるべきだった」と、日本中のマスコミが1回指を指して、「こんな当選はおかしい」と言われたことを、最高のプレゼントだと思いました。

当時、岩波書店の雑誌『世界』に、「500番目の議席から」という文章を書きました。どういう意味かというと、「最も入るべきじゃなかったと言われたことは、私にとって光栄であ

る。つまり 500 人の衆議院議員のうち、一番市民に近い、国会議員の中で一番外側にいるんだ」と。「これは願ったりだ」と書いたのです。そういう話をしていたら非難がなくなりました。「究極のポジティブ思考ですねえ」なんて新聞記者に言われて。それはとてもよかったです。つまり、仕事でちゃんと評価してもらおうと思ったので、11 年間で 546 回質問を重ねるような、仕事に仕事を重ねるような働きをしたということになります。

○ゆき 衆議院議員には3回挑んで、3回とも落ちたのですか？ ごめんなさい。

○保坂 5回挑んで、3回当選した。

○ゆき 5回挑んだんですね。

○保坂 2回は届かなかった。これはまた後日談ですけど、政権交代がありましたよね。このときに、民主党と社民党と国民新党で連立を目指そうということで、僕は野党統一候補として杉並区の石原伸晃さんと戦うという選挙で、このときは 11 万 6,000 票取って落選しているのです。だから、最初のデビューは最も少ない得票で当選した議員。最後の衆議院選挙は最も多く取って落選した議員。この中にいらっしゃるかどうかわかりませんが、日本の選挙制度を研究するにはうってつけの人材です。「人材です」は、変か？ たくさんのケースを持っています。

ついでに言えば、比例代表だけに出て、比例代表では社民党もだんだんだんだん傾いてきて、1 議席配分されずと。落選決定のときまで待つてようかという 4～5 人が、負けたよねという感じでいたときに、ちょうど朝日新聞の記者が、「保坂さん、落選の弁を」と、2 時ぐらいにインタビューに来たのです。

いろいろ落選の弁を語っていたときに、うちの若いスタッフが、「あれっ？」とか言って、「共産党の方の当選が消えました」と。「はあ？」って言ったら、朝日新聞の方が本社に電話して。そのうち共同通信の僕の友達が、「信じられないことが起きようとしています」と言うのです。「何ですか、それ」、「保坂さん、当選するかもしれません」、「何ばかなこと言っているんだよ。だって、社民党の比例の得票では、議席一つも取れないんだから」と。ところが、「自民党が全員当選し、なお一人余っているのです。そうすると繰り上がり当選」。初めてのケースです。これは香港の新聞に大きく「強運王」と、強い運の王と特大の字で、「強運王現れる」というふうに出ました。

○ゆき jrCd[、石原さんに敗れてしまったところに、世田谷区長に出てくださいという話が持ち上がった？

○保坂 敗れてから、次の年に参議院選挙に出て…。

○ゆき ああ、そうか。その前に。。

○保坂 結局、政治の場というのは永田町以外にないと思って、現実には15年ぐらいはそこで活動していたわけですが、まあ首長になろうとは全然考えていなかったです。それが大きく変わったのは東日本大震災です。南相馬市に桜井市長という方がいらっしやって、本当に国からも東京電力からも情報がなくて、市民には問い詰められていらしたのです。「おれたちは逃げた方がいいのか、それともとどまるべきなのか。市長、はっきりしてくれ」と。彼には何の情報もないのです。だけど、対応しなければいけない。その姿を見て、感銘を受けました。

東京に帰ってきて、3月30日に「世田谷区長に出てくれませんか？」という人たちが来まして、「何日か考えさせてください」と言って、4月6日に「じゃあ、やりましょう」と立候補の記者会見をして、4月24日、18日後には当選をしていた。だから、物すごく準備して一生懸命やった選挙には2回とも敗れているのですが、ひょいとやったものは、ずっと入ったのです。

○ゆき 世田谷区長就任のところまで来ましたので、皆さんから、どんな質問でも結構ですので、してください。いつも最後のほうになって時間切れになってしまうので、今のうちから質問したいは人どうぞ。

○保坂 ちょっとフォローすれば…。そんな18日間で当選するというのは、もともとの衆議院議員時代に地盤にしていたのが世田谷区だったということです。世田谷区には、民主党で当時厚生労働大臣までやった小宮山洋子さんという方がいて、野党同士がぶつかるべきではないということで…。石原さんが強いので、だれも出る人がいない杉並区に、僕のほうがいわば転戦した。そのことを世田谷区民が覚えていてくれたということがあったのです。そうでないと、18日間では当選しません。

○ゆき 牟田さんとやっていたというのも、世田谷に関係があるんですね。

はい、どうぞ。あちらに「放課後」の幹事長がいます。千葉で福祉の仕事をなさっています…。

○市岡 千葉で障害者の相談事業・生活支援拠点というところのセンター長をしています、市岡と申します。

今の流れから少し飛んでしまうかもしれないのですが、今のようなコロナとか災害のときは、首長が物すごく大切だと実感しているところなのです。そうでないときは、首長は意外と目立たないのですが、今回のコロナなんかでも首長の対応とか、首長がい

ろいろマスコミに出てきたり、政策の中で非常に重要だと思っているのですけれど…。今、保坂さんが思っている中で、すばらしい首長だなあと思う人1名と、「ちょっとこの人どうなんだろう」という首長の方がいましたら…。

○保坂 全面的に評価するという首長は、なかなかなくて。1方面・1プロジェクト、あるいは幾つかのプロジェクトで頑張っているなという方はいらっしゃいますけれども。コロナというのは、すべてにまたがってくるので、なかなか難しいです。いわゆる感染症的な防御の効果だけでも、まさに市民生活や経済の問題もあります。それから、感染症対策というのは厚生労働省の指示のもとに、保健所を通して一斉に動くという仕組みになっているのですが、その仕組み自体が、非常に油が切れて動かない。感染症の専門家自体が古すぎて、現状に対応できないということは、去年の今ごろから感じていたことでした。

ですから、ある意味で「この人は一番ひどい」という人も挙げられないけれど、特にだれかのことを意識して、参考にしているということもあまりないです。ただし一つ一つにおいては、全く私が気づいていないことについてちゃんと目線を配っていたりする人は、本当に多数います。

例えば話、今はインターネットで見ている方も多いのですが、世田谷区でワクチンの接種券が、75歳以上の人にきのう配達されたのです。10万通ぐらいですか。これには、全国で起きている問題があるのです。ネットと電話の受付開始日・時刻が同じなのです。「何月何日の午前9時から」とやると、ネットでどんどん枠は入ってきますから、確保数にもよりますが多分30分ぐらいで…1時間ほどすれば埋まってしまうのです。ところが電話は、時間がかかるのです。電話でやっていると、多くは話し中になります。そうすると、電話でよくて20～30人入れたところで、あとの950枠ぐらいは全部埋まってしまう。この問題はこうしたらいいかと考えて、自分で気づいたのです。

新聞を見ていたら、「リダイヤルを250回してようやくつながったら、もうとっくに売り切れていた。これはひどいじゃないか」と言って、お年寄り中心に100人が市役所へ押しかけたとか、そういうことがここの1週間で起きているわけです。世田谷区は、予約システムとかコールセンターとかをJTBに委託しているのです。それでいろいろ相談してみたら、さすがは旅行代理店、「いわゆる電話枠をつくりましょう」と言って、電話枠を設けてコールセンターに割り当てました。代理店は旅館を押さえてしまいますよね、あの考え方です。例えば、1,000あるとすれば500はコールセンターで仮押さえをしてあるので、ネットからは取れない。オペレーターがふたを開けると、そこで入力ができるという方式でやろうと。これがきのう決まったのです。

28日から電話・ネットの解禁日なので、両方パンクしないといいなあとと思っています。皆さん必死ですから、すごく難しいです。万を超える人が一斉にアクセスすると、サーバーがダウンしてしまう。どうやったらいいだろうと。ダウンする前に、「今混みあっています。後ほどアクセスしてください」という表示をしてダウンから守ろうとか、いろいろなことを考え

ています。

これを首長が考えるべきことかどうかというと、普通のときは現場が考えることなのです。ただ、現場が今、必死になって目の前のことをやっているのです、新聞を全部読むとかの余裕がないのです。僕は新聞を全部読んでいますので、「あれっ、これは起きそうだな」と思うと考えて、手を打っていくということはやっています。

○ゆき ほかにどうでしょうか？ あ、じゃあ、どうぞ。

○飯野 NHK の飯野と申します。お世話になります。

今、コロナの話が出たので…。世田谷方式で最初、検査の体制で独自のことをおやりになったのは、あれは保坂さんのアイデアだったのかとか。あと、あれをやるときにいろんな批判もあったと思うのですけれども、あれはどういうふうな形で乗り切られて、検査体制とかは今どういう状況なのでしょうかな？

○保坂 アイデア自身は世田谷区民で出し合って、東大先端研の名誉教授の児玉龍彦さん——『クローズアップ現代』とかでも紹介されていますが——その児玉先生から去年の今ごろ「大変なことになるよ」と電話があつて。当時から懸案だったのは、高齢者施設と病院を徹底的に守らなければいけないということで、最初は抗体検査をやろうとしていたのです。7月の終わりくらいになって第2波が出てきたときに、PCR 検査で高齢者施設に全部ローラーかけていこう、社会的検査というのを発案されて、やっていこうと…。世田谷区役所の中で意思統一するのは結構時間がかかりましたけれど、それで打って出よう。

その反響がすごすぎたのです。あらゆるテレビとか新聞でやったので、その反響のリバウンドとして、「意味がない」と。特に“いつでもどこでも何度でも”というニューヨークを指標にしてという枕詞が非常によく紹介されたので、「世田谷区は 92 万人の区民全員に PCR 検査を決めた」と。全くの歪曲報道なのですが、テレビなんかでそういうふうに決めつけて、「そんなことができるわけない。3年かかるんじゃない？」という言い方をされたりしました。評価と批判が半々ぐらいだったかな。

それともう一つは、プール方式といって、シングルで1人の人を1回の検査でやるのではなくて、オートメーションの機械を使いながら、5人なら5人をまとめて検査する。5人の中に陽性の人がいたら、そのグループが陽性になり、そうなったときに、もともとの検体を5つ別にとってあるので個別検査をする。「何番のだれが陽性だ」ということがわかりますよねというのがプール方式なのです。

日本は、そんなことを考えたこともない国だったのです。手で検査をずっとしてきたわけなので、オートメーションの機械もあまり入っていなかったし、ましてやプール法なんて聞いたこともない。そのため、テレビなんかで、「そのたびに呼び出されるそうである」とか、

「1回PCR検査に協力して、プール法でグループに入ってしまったら、仕事を休んで行かなければいけないんだ」というようなことを、とある大手メディアの論説委員が言っていたとか、まあ、めちゃくちゃでしたね。

やはり、日本社会にある同調圧力です。つまり、「国が決めているんだろう」と。それに対して、「人口が多いとはいっても、なぜ世田谷区ごときがそれをひっくり返すんだ」と。国や東京都を見ている、全然進歩がない。「ここは自治体で突破するしかない」というふうに私も宣言したので、それはまあ、あおった面もあります。

しかしながら、議会でもいろいろ意見が出ましたけれど、割といい意見も出ました。というのは、世田谷区は高齢者施設が1,200もあるのです。だから1周するのにどのぐらいかかるかという、3カ月ぐらいかかるのです。そうすると、定期検査とは言えないのではないかと。確かにそうです。そういった議論の中で、今もチームは動いていますけれど、高齢者施設で感染が出たとき、これまででは周囲の人が濃厚接触者で、検査を受ける。これを保健所がやっていた。それを、高齢者施設で一人でも感染者が出れば、お年寄りと職員を全員、150人であろうと全員検査する。これも同じ検査チームの二つの柱にしたのです。それは本当に第3波のときには生きてきて、保健所が検査する濃厚接触者を決める作業がなくなって、かなりの勢いで検査が進みました。

今現在で1万7,000、別のプール方式で3,000、計2万人の検査をしているのですが、実は11月から3月にかけて1万数千人の検査をした中で、78人の陽性の方がいた。この方のほとんどが無症状です。社会的検査というのは、症状がない人をやる検査なので。78人も無症状の人の検体が出たということ自体は、日本では初めてなのです。そういう例はない。

Ct値といって、どのぐらいPCRを回すと検出されるかというのは、少なければ少ないほどウイルス量が多いのです。40が限界なのですが、多ければ多いほどウイルス量が少ないわけです。それで、78人のうち27人がいわゆるスプレッダーと呼ばれる25以下、20以下の人が10例。そのうち8名が高齢者。スプレッダーグループ全体27人のうち8名が高齢者。つまり、ウイルス量が大変多くて、マスクをしていても感染が広がるような方は、どちらかというと元気で若い方なのか。若い方がウイルスを持ち込んだのは間違いないのですが、高齢者の中で症状が全く出なくて、それだけウイルスを増殖させてしまう方がいたというのは、WHOの見解を書きかえる結果なのです。今、慶應大学の先生と一緒に分析報告書をつくって、一応それを厚労省に提出しようとしています。

今、高齢者施設の検査は重要だと言われながら、全然広がっていません。なぜかといえば、行政の当局者にその意味がわからないのです。「意味がない、意味がない」と、ついこの間まで多くの人が言ってきたのです。だから、そういう成果を上げております。

○ゆき ありがとうございました。ほかにどうでしょうか？

お役所というところに入って、お役所の文化とはどんなふうに対決、または融和された

でしょうかしら？

○保坂 結局、首長がどんなにかけ声をかけても、職員が全くそっぽを向いていたら何一つ進まないです。世田谷区の中で歴代の担当者が、「よし、やってみよう」と相当無理なことを言いました。例えば、長野県の電力を世田谷区の保育園で使えないかと。このミッションは、かなりつらいミッションです。でも、それは長野県側にも協力者がいて、3年かけて実現しました。これが電力の自治体間連携のひな形になって、今や全国に広がっています。そういうことは、言い続けるとたくさんあるのです。

区の職員に対して、明確に何が求められているのかを言う。抽象的ではダメなのです。「よりよくしてください」というのが、一番だめなオーダーです。例えば、先ほどのCt値の話にしても、「Ct値の分析を、厚労省に出せるレベルまでシャッフルしてつくろう」と言うような明確な指針になるので、一生懸命やってくれているということもあります。プール方式も、国は認めていなかったのです。だって、感染研が、やったことがないわけなので。そんな国は、実は日本ぐらいなものなのです。それを認めさせようという戦略目標を立てて、認めさせていくための段取りをして、実績を積み上げてレポートにして出していく。それを大臣と直接会って談判して、ついにこれを認めましたので、国全体としてできることになっています。

そういうふうに、一つ一つの局面で、「わかった、走ってみよう」という職員がいるということです。そこが非常に感謝しているところです。

○ゆき 私の経験では——あまり大っぴらには言えないと言いながら、マイクを持って言うのですけれど——世田谷区の「認知症とともに生きる希望条例」は、今、大変有名になって、保坂区長にインタビューが殺到しているのですけれど、始まりは神戸でやっている、「認知症の人が何か事故を起こしたら、その保険を自治体で肩代わりしましょう」という平凡なものでした。そこに、ノブティー区長が、ドラマティックに委員を6人加え、委員長も取りかえるという荒療治をなさいました。あの決断は大変なことだったのでしょうかしら？

○保坂 これは、元国会議員だったということもあるのだと思いますが、あるテーマを目前にしたときに、平均的なものをやろうという発想は、私には全くありません。一番楽なのは、認知症条例は既にほかの自治体であったので、例えば七つの自治体の認知症条例を並べて表にして、いいところを組み合わせると認知症条例ができるではないですか。

でも、それでは何の意味もないです。要するに、価値を創造することが我々の役割だと思います。ということは、世田谷区で条例をつくるということは、少なくとも日本の福祉関係、行政自治体に関して、新しい視点を提供しようということがまず原点としてあります。

認知症に関しては、自分の母親も認知症をだんだん進行させていったのでよくわかる

のですけれど、日常的にできなくなっていくことと、鮮明に覚えていて、よくここまで克明に覚えているよねということがあって、亡くなる直前までその話はずっと無限にできるので。そういう状態で亡くなりました。ですから、何にもできない人とか、治療の対象というだけではなくて、できることに着目して、「社会の中で御本人の居場所があり、味方がいて、役割や誇りをもてることが大切」という、ゆきさんが言われているようなことは、すごく、そうだと思うところがあった。

一方で、役所というのは議会のほうから、「早く、スピード感をもってやれ」と言われる。僕は実は、「スピード感」という言葉が大嫌いなのです。日本語としてもおかしい。「スピード」ならわかるのですが、「スピード感」とは何なのだという感じなのです。ジェットコースターに乗っているときの、風の当たり具合かいという感じなのですが、粗製乱造はよろしくない。どちらかというと、熟議型・熟成型が好きです。つまり時間をかけても、むだなようであっても、練りに練って話し込んで、迷走と言われて行ったり来たりして、そして熟した柿がポツと落ちるように、あるとき「でき上がった」という瞬間を迎えるような、そういうふうには価値は生み出されるものだと思っていたのです。

早くつくろうということに傾いていたときに、「まだまだ議論は足りないよね」と。

認知症の本人の参加ということが、世界的に大きな傾向になっているのに、認知症の御本人たちが参加したワークショップをやったけれど、1回だけやって、それで十分ということにはならないということで、ゆき先生とも話をして、「もう1回委員会を再組織しよう」と。条例ができるのは遅れてもいいんだということで、仕切り直しをしたということです。

○ゆき 事務局が肅々とやっているのに、仕切り直しというようなことは、しばしばなさるのですか？

○保坂 全部やっていたら嫌われますよね。ただ、どんなに努力したということでも、例えば幼稚園を全部民営化するとか、そういう政策は違うと思うので、時間がかかったと言われても全部やり直してもらいました。なので、事と次第によります。

担当者が苦勞したといっても、どんな分野でも、たとえ間違っただけでも苦勞はあるわけですね。人を幸せにすることだけが苦勞ではなくて、苦勞しながら人をあまり幸せにしないということだってあるでしょう。そういう意味では、どんなに時間がかかったとか、苦勞したかということはあまり問題ではなく、どういう価値を提示するのかということが、私にとって判断の基軸になっています。だから、やり直したほうがいいねっていう…。

○ゆき 区長の権限があるとできるものなのですか？

○保坂 区長とか市長の中には、「全部任せているから」という人もいます。「実務は、副市長とか周りの人たちが全部やってくれる」というタイプの人もいます。だから、僕は

割と口を出しているほうなのでしょう。ただ、すべてにわたって出しているわけではなく、「ここぞ」という重要政策に関しては徹底的にマークして、任せるものは任せていくというような強弱のつけ方はしています。

○ゆき 「ここぞ、というときだけだ」ということを、お役所の人々が納得したのでしょうか。そういう意味では…。

○保坂 条例ができ上がったからの反響がありましたからね。そうすると、やり直してよかったと思ったでしょう。

○ゆき 私が途中で質問を挟んでしまいましたけれど、どうぞ皆さん。はい、どうぞ。

○ヨシダ 看護師をしておりますヨシダと申します。区長になられてから人気が出て、住民の方がふえたのでしょうか？ いかがでしょうか？

○保坂 これは本当に難しい質問で、結果として住民は 85 万人から 92 万人までふえました。ただそれが、人気が出たからかどうかは、正直言ってわかりません。

ただ一つ、そこで大きいのは、「子ども・子育て応援都市」と銘打っていても、待機児童がナンバー1 ということで、さんざん批判もされたのですが、地下室とかガード下に保育園はつくらないという方針でやりました。どんなに批判されても、子供の成長・発達にとって、環境はすごく大事だということです。結果として、保育園も2倍以上にしました。しかも認可保育園を中心に展開をしたので、園庭のあるところが大半です。去年ようやく、国基準の待機児童はいなくなりました。そういう環境整備自体が呼び水になって、人口がふえたというところがあったのではないかと思います。全国的にも待機児童対策というのは言われたことなのですが、どこもやっているようでいて、やり方は大分違います。

ですから、いわゆるシティブランドみたいな話だと思うのです。イメージでしょうかね。世田谷区も 90 万人以上いるので直接対話は非常に難しいのですが、できるだけ私自身がそれぞれのテーマの当事者の人と会って、話をするということも心がけています。また、住民が横につながって、お互いに意見交換して、行政の職員も巻き込んで、いい子育て環境をつくるということもしています。

在宅子育ての、あるいは育休中のお母さんたちを対象にした「子育て広場」というところは、空き家を活用して新しいプレーヤーを呼び込んで展開をしています。あるいは、働きながら、といってもフルタイムの保育園は必要なくて、週に3回・3時間働けばいいような、例えば商店で帳簿をつけるとかに集中したいという人に対して、「子育て広場」に子供を預けながら、2階へ上がってワーキングするという仕組みをつくったり…。これは厚生労働省と2年がかりで交渉して、認めてもらったのですが、そういう細かいことをいっぱい

やっているのです。

ですから、子ども・子育ての部分では、多少は世田谷区に住もうという人が出たのかとは思いますが、今、コロナで厳しくなって収入が激減したということで、世田谷区を離れて郊外に行くという方も出てきていますので、今後どうなっていくかはわかりませんが…。

○ゆき どうぞ。お医者さんです。

○美馬 美馬と申します。医者をやっています。ユキさんの会に保坂展人さん、ノブティ一さんが来られたときは、時間がなかったのでそんなに魅力的に感じなかったのですが、ユキさんの質問もよくて、引き出してきて、何か魅力がじわじわと出てきて楽しんでいます。

質問ですけど、中学校・高校と非常に特異な珍しい形で大きくなっていかれたわけですけど、その経歴を見ると——僕は高橋源一郎が好きで彼もそのような感じで、またタイプが違いますが——保坂さんには、ユキさんの持っているようなネットワークみたいなものが、中学校・高校時代につくられたようなものがあるのでしょうか？ あついは、全くと一匹狼的に来られたのでしょうか？ ということに興味を持ちましたので、質問させていただきます。

○保坂 もちろん、中学校時代からの友人たちとか——中学で“はみ出し仲間”みたいなのがいて、はみ出したあと病院の院長をやっていたりとか、弁護士になったりというものゐるし、いろんなタイプの人たちとつながっています。

国会議員のときに 546回質問したのですが、その半分以上が自分だけではできない質問なのです。例えば金融の関係だとか、医療の関係だとか。そうすると、その問題に通じた専門家で市民的にサポートしていらっしゃる方とか、当事者と国会議員をつなぐかけ橋になってくださっているような学者の方とか、ジャーナリストとか、手弁当でやっている方とか、そのネットワークがあるのです。だから、何か聞かれてあしたやらなければいけないというときに、大体の問題で電話をかけられる人が2〜3人は思い浮かぶのです。やはり今、世田谷区長としていろいろなことができているのは、そのおかげです。助けてもらいながら、この 10 年間世田谷区長をやってきたし、それ以前の国会議員時代もそういう人脈は大分役に立ちました。

○ゆき 新聞記者になられても、すごい特ダネ記者になりそう。

○藤原 藤原瑠美と申します。きょうはありがとうございました。隣の大田区に住んでいます。

私はスウェーデンの認知症ケアの研究をしていて、ここのところ全然行けなくて、とてもこういうふうには言えない感じなのですが…。お伺いしたいのは、女性の活躍です。

スウェーデンでは、いわゆるコミュニンというか、地方自治体というか、市ですね、もっというと小さいのです。人口3万とか5万とか、大きくて10何万とかなのですけれど、女性がめっちゃめっちゃに活躍しているのです。日本は今、150何位ぐらいです。生活に密着して、そういう仕組みがとてもよく、特に北欧はできていると思うのです。

どうしても日本の場合は、ちょっと国政を変えたみたいな感じで、大田区の議員の方なんか結構、男性優位みたいな感じなのです。地方自治というか、自立して地方が生きていくというか、これからは女性が活躍していく日本になってくれるといいなあと思っています。まず世田谷区から、どういうふうにやっていくかということが気になって、このままだと余りにもひどいのが日本の現状なので、それをどこから変えていったらいいのかということをお伺いしたいと思います。

○保坂 実は区議会議員50人の中では、女性が占めている率はかなり多くなっていて、得票のトップのほうは全部女性で、得票順で見ると女性がバーツと並ぶという傾向はあるのです。一方で、世田谷区の幹部職員は200人近くいて、その中で部長職は60人くらいいるのですが、女性が少なくなってきたのです。去年の管理職試験に受かった人が女性ゼロという、本当にショッキングな状態に遭遇しているのです。

このままいくと世田谷区役所の中でも、福祉分野なんかは特にそうなのですが、女性がリードしてきた分野の担い手がだんだんと細ってきているという、逆の現象に直面しています。これは正直に、そういう課題があるということを議会でも言って、どうしていったらいいのだろうかというのを検討して、働き方の問題とかいろいろ変えなければいけないところがあると思うのですけれど…。

でもコロナ対策とかは、今一番大事なところは女性が担っています。当然、保健所もそうだし、ワクチン接種の責任者も女性だし、社会的検査も女性が(男性も一人頑張っているのがいるけれど)頑張っている。だから、相当大事なところをやってもらっているということです。

日本社会自体、非常に停滞感が色濃くて、非常に悲観的になってきていると思うのです。ワクチンが何でこんなに遅いんだと…。どうして検査が進まないんだと…。検査が進まないと言いながら、1年やっているのです。どうも、この社会の病理としては、縦割り、既得権の堅持、そういうものが非常に色濃くて、「過去をあしたに」という力がすごく強く働き過ぎている。それで成功してきたのは相当昔の話で、アジアの各国にどんどん抜かれているのが、日本の現在だと思います。

北欧の話を書きましたが、フィンランドには「ネウボラ」という、出産の前から御夫婦に寄り添って、「生まれてくる子供の担当は私よ」という形で、ずっと相談に乗っていく制度があります。世田谷区では、「世田谷版ネウボラ」というものを、フィンランドに学んで始めて

います。また、斎藤環さんという精神科医が提唱している「オープンダイアログ」というものに大変啓発を受けて、区で研修を何度もやってもらったりとかしています。

あと、学校教育改革というのも本当に佳境に入っていて、教育の問題は一番原点なのですが、10年の中で一番あとにきているのです。それだけ、いろいろ難しいところもあるのですが、ずっと積み上げてきました。例えば一昨年の2月に、公設民営型のフリースクールというものをつくりました。いわゆる不登校のお子さんたちが、5年前は400人だったのが今は800人になっていて、激増しているのです。学校に行けない、行かないという子が小学校の1年生から出てきているということで、「東京シューレ」というところに運営を任せたのです。大変人気になりまして、見学を受け付けるのも3カ月～4カ月待たなければいけないという状態になったので、それをふやしていく。それから、不登校特例校というものをつくっていこうと…。

北欧の話で言うとフォルクホイスコーレ、16歳・17歳の2年間ぐらいを、芸術・文化（ダンスとか、演劇とか、音楽とか、彫刻とか、絵とか、スポーツも入りますが）を2年間、徹底的にやりたいようにやるという全寮制の学校があって、そういうものが日本にも必要だと思っています。20年前からそう思っていたのですが、ようやく文科省も「そうだね」ということをかなり強く意識し始め、一番遅れるのは教育委員会で自治体の現場なのですが、公立の学校でアートスクールをつくらうとしています。ぜひ実現したいです。要するに、芸術・文化を中心に回していくような学校です。これをつくっていこうと思っています。

○ゆき 納得。ありがとうございます。はい、どうぞ。あ、あちらに。

○サイトウ 看護の大学で教員をしていますサイトウと申します。きょうはすごく興味深いといえますか、勉強になりました。ありがとうございます。

お聞きしていて、皆さんは社会的な質問とかをなさっていたのですけれど、私はシンプルに、先生が子供時代につらい思いをされたとき、どなたのどういうことが支えになって、自分を保っていたのかということにすごく興味があります。

私自身は、父が早くに亡くなったということで、意外と教員に色眼鏡で見られることが多くて、よく、「この子は不良になるんじゃないか」みたいな…。「絶対ならないぞ」と思いながら子供時代を過ごしたのですけれど、ほかの子が悪くても自分がしかられるという経験も結構しました。今度は自分が母になると、また先生の対応とかで、「どういうふうに子供を守っていいのか？」というようなことにも悩んだりするのです。本当の支えって何だろうというような…。それで、絶対先生にはならないと思いながら、立場は違うのですけれど、結局今は先生をやっているのです。そういったことも含めて、いろんな問題を抱えている学生さんにも出会いますので、ヒントをいただけたらと思います。どうぞよろしくお願いします。

○保坂 そうですね。親との関係で言えば、とても子供を信頼していたと思うのです。特に父親は、子供のころから「君の意見はどうなんだ？」「君はどう考えるんだ？」ということ、小学校3年・4年のころから聞いていました。特段、意見がすぐには出てこないのを、考えるということをしていました。

中学3年で、大きくポーンとバーンアウトしたわけです。梓組みからそれて、外れたわけですが、そのときに両親とも、見放したり否定したりということはなかった。それだけではなく、一緒に怒ったのです。内申書に差別をする。そして15歳の少年に対して、多数の教員が卒業式から引きずり出す。私は卒業式の会場から遠い所で、床に押さえつけながら卒業式を迎えたのです。学校の教育にあるまじき、そういう姿を見ていて、結局裁判を起こすときに、そこに両親もいたのです。そこが大きかったのではないかと思います。

やはり、どこかで信頼されているということがあると、目の前にどんなに不合理で認めがたい壁が立ちましたとしても、そこは越えていけるのではないかという、どこか楽観論があったということです。

それから、子供のころに本を読み過ぎていて、偉人伝とかを読むと、世の中で何かをやる人には相当変わった人生を歩んでいる人が多いではないですか。そういう自意識の過剰というのがとてもあって、人がやらないことを好んでやるというか、人がやっていることには興味がないというような、そういう性格がありました。

ですから、はたから見れば、全く将来の保証もない、不安定なアルバイトを転々としながら、金にもならない原稿とか、ノートに文字を書いて何が楽しいのだろうという時期も、10代後半から20代にかけて数年あるのですが、意外と物書きとしてのデビューは早かったので、平均的なサラリーマンの何倍もの収入を得て、その印税でフリースペース(若者たちに自由に使っていいよという場所)を開くとか、やりたいことが比較的できたわけです。逆境で、地獄と思われていたところに行ってみただけで、温かい部分もあったし、つらいこともあったけれど、世の中捨てたものではないなというのはありますね。

だから、そういう意味では、一番支えてきたものは自己肯定感というか、自分で自分を引っ張っていくようなところがありました。そんなところでよろしいでしょうか？

○ゆき 中学のとき出会った奥さまは、支えになったのでしょうか？

○保坂 そうですね。当然、支えになりました。ただ、これも平たんな道ではなくて…。常に僕は自分を認めないという人に惹かれるのです。「尊敬します」というと嫌になるのです。要するに、否定してくる者に対して興味がわくというか、そういうタイプなので、僕に対しては相当否定的でした。

○ゆき いつごろ結婚された？ 何歳ぐらい？

○保坂 ええと、25 くらいですか。

○ゆき それで、その後も否定とかはずっと続いて、切磋琢磨…。

○保坂 まあ、今でもです。

○ゆき 今でも…。御苦労様でございます。

でも、「君はどう思う？」というのは、私はデンマークやスウェーデンに行くと、子供に、「このお客さんと一緒にレストランに行こうと思うけれど、君はどう思う？」といって、しばしば否定されて行けなかったことがあったりするので、「君はどう思う？」というのは、お父様は素晴らしいと思って伺っていました。

あと一人くらいですけれども。はい、どうぞ。

○女性 非常に素晴らしいお話を、ありがとうございました。

非常に広い分野をカバーされて、とてもエンカレッジされたというか、素晴らしい方がいらっやあってと…そういう言い方をすると否定していないので、申しわけないのですけれども。今、ユキさんのほうからもちっとパーソナルな質問が出たので、そういう質問もしているのかなと思って、少しそれにも触れますけれど、15 歳でなぜ家を出たのですかという質問です。

私が知りたいのは、人間が最初に一番親密なおつき合いをする相手は、親だと思うのです。普通の場合はそうなのですから…。それで、親子関係について、個人的にどういう経験をなさって、どう思っているのかということ。それから、女性の進出を考えた場合、親子関係のことは非常に重要で、あと教育問題についても非常に重要だと思うので、首長様として親子関係ということについてどういう考えをお持ちなのか、教えていただきたいです。

○保坂 まず、親子は近いようでありながら他者である。つまり、一番近い他人なんだということをしっかり認識すべきだと…。私は自分自身の子供に対しても、そういうふうに接してきました。つまり、しばしば親子の同一化幻想というか、いわゆる教育虐待なんていうことが起こりますけれど、「私が果たせなかった学校に、この子だけは進学させたい」ということに、しばしば悲劇が起きます。そういう子たちからの訴えや、叫びも聞いてきたのです。「いじめの最大の加害者は、親である」と、そういう声です。特に早期教育なんかはがはやったときに、教育産業があおって、親の焦りみたいなものをうまく商品化して、「やらないと遅れてしまうよ」というような脅迫をして、わだちにはめていって親子を不幸にしまうということなので…。

○ゆき 『ちょっと待って！早期教育』という御本もございます。

○保坂 「公文塾」という有名な塾があつて、上から読んでも公文公、下から読んでも公文公さんという方が創立者です。実は僕、16歳のときに、全体の職員が7人しかいないときにその塾K事務局で働いていたのです。だから、公文公さんもよく知っているのです。実は公文公さんは晩年、早期教育にはまりまして、『2歳で本が読める、3歳からでは遅すぎる』という本を出したのです。これがばんばん売れて、早期教育ブームが起きます。

でも、それを丹念にジャーナリスト的に追跡していくと、外部注入というか親のプログラムで2歳・3歳から漢字、あるいは4歳で数学の方程式とかをやっていた子は、中学のときに大体バーンアウトしているのです。学校に行かなくなるとか、吐き続けるとか、親からつくられた仮面を自分ではぐ作業を始めます。そういうことをずっと取材してきたので、親と子は違う人間だということは、クールなようですけれど本当に大事なことだと思います。

なぜ家を出たのかを一言で言えば、「恥ずかしかつたから」です。何が恥ずかしかつたのかというと、自分は15歳で、例えば同じクラスに、15歳で青森県から出てきて、アパートを借りて、仕事をして、夜学に通ってきてという子がいるとか、クラスの半数以上はそうやって昼間働いている。一方で、「社会を変える」とか「改革する」というような大言壮語をしながら、僕自身は朝10時・11時まで寝ている。このギャップに耐えられなかったのです。「何て自分は、ぬるいところにいたんだろう」みたいな。同じ年の子たちがみんなそうやって自立してやっているのに、「自分でアパートを借りたい」と、相談もしないで借りてしまったのです。

何もわからない15歳ですから、「一番安いところはどこですか？」と聞いたら、「ここにあるよ」と…。中野区の弥生町という所でしたけれど、当時は家賃6,000円です。なぜ安いのかということが、相当経ってからわかったのですが、隣が密着し過ぎて光が差し込まない部屋なのです。真っ暗なのです。それにも気がつかなかったのです。人に言われて気がついたというくらいでした。

それで、「引っ越すよ」ということを親に言って、親も反対しなかったです。「やるなら、やってごらん」という感じだったでしょうか。心配だというので時々見に来たりしましたけれど…。

○ゆき ありがとうございました。すばらしい最後の締めくくりで。

どうしても肯定したくなってしまうので、どうしたものかと思って悩んでいるのですが…。きょうおっしゃったことは、何かすべて私は、「なるほど」と思って聞かせていただきました。

それから、いろんな改革に取り組んでくださってありがとうございました。裏表になっている「世田谷区政10年をふりかえる」というものをごらんになると、このほかにも、いかにたくさんのかをされてきたかがおわかりになると思います。これはネットで聞けるんですよ

ね？

○保坂 そうです。ユキさん、ちょっと宣伝していいですか？

○ゆき どうぞ。

○保坂 世田谷区政を振り返って、実は 53 ページのパワーポイントがあります。今週 25 日が、区長になって 10 周年なのです。それで、本当はリアル集会で集まってもらって報告する予定だったのが、緊急事態宣言が出るということで、全部 YouTube で配信することになりました。もし続きを聞いてみたいという方は、ホームページで申し込んでいただければ、事務所に連絡していただければ、そのアドレスなどを送ることができます。

○ゆき 全員に送りますので。

○保坂 それから、「政治スクール」という企画もやっています。特にきょうはいろいろ断片的に話しましたが、どうしてこんな人生を歩んだのというのが一番まとまっているのが、この「ロッキング・オン」という音楽の会社から出ている、『脱原発区長は、なぜ得票率 67%で再選されたのか？』という本。これが一番まとまっているかと思います。

ポートランドに通ってまとめた本であるとか、事件が起こった1カ月後ぐらいに書いた相模原事件…検索してくれると何冊かありますので、お読みいただけたらと思います。あと、ツイッターをやっていて、10 万 5,000 人ぐらいの人が見ているのですが、もしよろしければ、フォローをしていただけると、いろいろな情報が流れますので、よろしくお願いします。

○ゆき ありがとうございました。では引き続き改革を、お願いいたします。